

# エコツーリズムの聖地マダガスカルの野蚕シルク生産

—— 森林資源の持続可能な開発に向けた考察 ——

杉 本 星 子

はじめに

マダガスカルは、アフリカ大陸の南東400キロに位置し、約58万7千平方キロメートルすなわち日本のほぼ1.6倍の面積をもつ、世界で四番目に大きな島である。人口は約1千968万3千人（2007年現在）で、マレー系、スワヒリ系、アラブ系、インド系、中国系などさまざまな起源をもつ人びとがくらす。マダガスカルの住民は、一般に18の主要民族から構成されるといわれる。しかし、マダガスカルの民族分類は明確ではなく、人種的な系統の違い以上に、生態環境の違いによる生活様式の差異や言語方言に依拠している<sup>1)</sup>。マダガスカルは、独特の生態型によって知られ、動物の80%、植物の90%が固有種である。美しい希少種の鳥類が多く、バードウォッチャーの楽園ともいわれている。ワオキツネザルやシファカなど世界の原猿類の九分の一が、マダガスカルのみで生息する(写真1)。ハウシャ亀やカメレオン、赤蛙 (*Dicophus Anton-*



写真1 マダガスカル固有種の原猿

*gilibii*) など、爬虫類や両生類の種類も豊かである。また、ランやアロエ、旅人木やバオバブ、オクトパスツリーといった植物を見るために、マダガスカルを訪れる観光客の数も少なくない。多様で豊かな動植物、昆虫からなる森林資源は、住民の日々の生活の糧であるとともに、外貨獲得のための重要な観光資源である。また、石灰岩の尖塔状の岩石が林立するツィンギイや白い砂浜がつづく美しい自然景観も、重要な観光資源である。マダガスカルの観光産業は、こうした自然を楽しむことを目的としたネイチャー・ツアーから始まった。

しかし独立以降、とりわけこの数十年來、人口増加とそれともなう耕作面積拡大のため、急速に山野の開墾がすすんでいる。焼畑や牧草地づくりのために、野焼きが繰り返され、それに加えて不審火による山火事が常態化し、毎年、広大な面積の森林が消失している。さらに、気候変動の影響で南部地域の乾燥化がすすみ、祖先の地を離れざるをえない住民が増加している。そうした人びとが移住先で森に隠れ住み炭焼きをして生計をたてることによって、森林の減少にさらに拍車がかかっている。マダガスカルの原生林は、すでに国土の10%に満たないところまで失われたといわれる。こうした状況のなかで、マダガスカル政府は、森林資源の保護とその持続可能な開発の方法を模索するとともに、エコツーリズムの推進を提唱している。駐日マダガスカル大使館のホームページは、マダガスカルを「ユニークなエコツーリズムの聖地」と紹

介している。

本稿では、マダガスカルのエコツーリズムと現地住民の生活との関係について考察したのち、マダガスカルは森林資源のひとつである野蚕に焦点をあて、森林環境の保全をとまなう持続可能な開発の一手段として近年さまざまな方面から注目されている野蚕シルク生産の現状と開発のための方策について考える。ただし、本稿は、持続可能な開発としての野蚕製織産業の有効性自体を論証しようとするものではないことを、はじめにお断りしておく。

なお、本稿の野蚕関連資料は、主として文科省科学研究費補助金基盤研究(C)「グローバル状況下のマダガスカルにおける複合的シルク生産に関する経済人類学的研究」(研究代表者:京都文教大学 杉本星子、2006年度-2008年度)による現地調査の成果に基づくものである。

## 1. マダガスカルのエコツーリズム

エコツーリズムという観光形態が注目されるようになったのは、1990年代のことである。1960年代以降、世界規模でマスツーリズムが盛んになるとともに、観光による自然環境の破壊、文化遺産の劣化、伝統文化の誤用や悪用、地域社会の階層分化、犯罪の増加が問題になった。とりわけ1980年代に開発途上国における観光開発が進むとともに、そうした弊害はいっそう顕著になった。そうした状況の下で、1987年に環境と開発に関する世界委員会が「持続可能な発展(sustainable development)」を提唱した。それをうけて、自然環境を保護する「持続可能な観光(sustainable tourism)」をめざすエコツーリズムが推進されるようになった(石森 2002:707)。

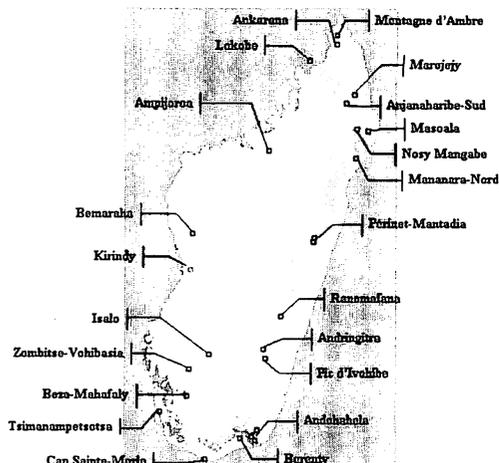
日本では2007年6月20日にエコツーリズム推進法が成立し、2008年4月1日に施行

された。この法律の第二条において「エコツーリズム」とは、「観光旅行者が、自然観光資源について知識を有する者から案内又は助言を受け、当該自然観光資源の保護に配慮しつつ当該自然観光資源と触れ合い、これに関する知識及び理解を深めるための活動をいう」と定義されている。そして、第三条第一項では「エコツーリズムは、自然観光資源が持続的に保護されることがその発展の基盤であることに鑑み、自然観光資源が損なわれないよう、生物の多様性の確保に配慮しつつ、適切な利用の方法を定め、その方法に従って実施されるとともに、実施の状況を監視し、その監視の結果に科学的な評価を加え、これを反映させつつ実施されなければならない」、第三項では「エコツーリズムは、特定事業者、地域住民、特定非営利活動法人等、自然観光資源又は観光に関して専門的知識を有する者などの地域の多様な主体が連携し、地域社会及び地域経済の健全な発展に寄与することを旨として、適切に実施されなければならない」と規定されている。この法令に規定されているように、エコツーリズムには①自然環境教育と②観光資源としての自然保護に加えて、③地域社会や地域経済の発展という側面があり、地元の人が受益者になるような観光産業の仕組みをつくること为目标されている。それでは、エコツーリズムの聖地を自負するマダガスカルにおいて、この3つの要件はどのような現状にあるのだろうか。

マダガスカルは自然保護区設立計画は、地域住民の参加型保全を基本とした社会的、経済的側面を含めた総合プロジェクトとして策定され、地域振興事業としてとくにエコツーリズムが重視されているところに特徴がある。マダガスカルは自然保護は、おもにマダガスカル政府と国際組織の連携によって進められている(市野2007:199)。1987年に南カリフォルニアのキャサリン島

で、世界自然保護基金(WWF: World Wide Fund for Nature)をはじめ、マダガスカル  
の動植物研究に関心をもつ研究所や大学からなる諸組織の代表とマダガスカル政府が、  
マダガスカルの自然保護について協議した。翌1988年に、マダガスカルの環境活動計画  
が作成され、1990年の法令で「公園管理協会 (ANGAP: Association Nationale pour  
la Gestion des Aires Protégées)」の設置が定められた。公園管理協会 (ANGAP)  
は、1992年より環境活動計画 (PAE: Plan d'Action Environnemental) を実施している。  
2003年9月に、ダーバンでおこなわれた世界公園会議で、マダガスカル大統領ラ  
バルマナナ (Ravalomanana) は、マダガスカルの生物学的多様性を保全するために、  
約1万7千平方キロメートル (2003年現在) の自然保護区の面積を、5年以内に6  
万平方キロメートルにまで拡大するという政策「ダーバン・ビジョン」を発表した。  
このビジョンによって、自然公園、天然記念物、景観保護、自然資源保護という自然  
保護のための4カテゴリーが設定された。2006年1月、「マダガスカル新公園管理シ  
ステム (SAPM: Système d'Aires Protégée de Madagascar) が導入された。これは、保  
護区の拡大とともに貧困の削減に寄与する持続可能な資源活用をめざすものであった。  
2008年11月、「公園管理協会 (ANGAP)」は、「マダガスカル国立公園 (PNM: Parcs Nationaux de Madagascar)」と改  
名された。現在、マダガスカルの自然保護区は、厳格自然保護区、国立公園、野生生  
物保護区の3つに分けて管理されている。しかし、近年の森林の減少にともなって新  
しく大規模な保護区を確保することは難しくなり、分断された小規模な保護区が増加  
している (地図1)<sup>2)</sup>。

公園管理協会 (マダガスカル国立公園) が管理する保護区では、森林の伐採や狩猟、  
動植物の持ち出しが厳しく禁じられている。観光客は、公園ガイドの付き添いなしに保



地図1 マダガスカルのおもな国立自然公園と保護区  
[WWFホームページ ([http://www.air-mad.com/about\\_parks.html](http://www.air-mad.com/about_parks.html)) より]

護区内を散策してはならない。観光客が支  
払う入園料とガイド料は、自然保護と公園  
の管理に使われる。近隣の住民が公園の整  
備や管理のために雇用されている。とはい  
え、ガイドになれるような高等教育を受け  
られる村人の数は限られている。また国立  
公園であるため、観光客向けの商品は、公  
園管理協会が管理する公園内の小さな店に  
置かれているだけであり、公園の周囲に村  
人が勝手に売店などをつくることはできな  
い。エコツーリズムの要件である、①自然  
環境教育と②観光資源としての自然保護に  
ついての仕組みづくりや配慮はなされてい  
るが、③地域社会や地域経済の発展とい  
う要件を満たすほど、エコツーリズムが地  
域住民の経済発展に貢献しているとは言い  
難い現状にある。

## 2. 森林資源を活用した伝統工芸

マダガスカルの人びとの生業や生活形態  
は、地域の生態環境により大きく異なっ  
ている。西部や南部の乾燥地帯では牧畜が盛  
んである。中央高地では水稻耕作が発展し、  
河川の両岸や湿地ばかりではなく、山の斜  
面を大規模に開墾して棚田がつけられてい

る。東部の雨が多い森林地帯では、焼畑耕作により陸稲やマニオク、バナナなどが栽培されている。いずれの地方でも、農業や漁業、牧畜などに加えて、動植物や昆虫をはじめとするさまざまな森林資源が活用されている。植物の種子、果実、根菜、葉、樹皮は、食料や薬、繊維として利用され、木材は建材、家具、什器、燃料として用いられる。マダガスカルでは、動植物ばかりでなく昆虫類もまた、住民の貴重なタンパク源となっている。とくに甲虫類や蛾や蝶の幼虫や蛹など、食用とされる昆虫の種類は多い。また広い地域で、くりぬいた丸太を森林内に据えて野生のミツバチに巣をつくらせ、蜂蜜をとっている。村や町の市場では農作物ばかりでなく、蜂蜜や蜜蝋、多様な葉草、さまざまな植物繊維で編んだ籠といった森林の産物が並べられている。中央高地では、野蚕の繭と蛹、野蚕糸の織物が、蜂蜜と並ぶ重要な現金収入源となっている。

エコツーリズムでは、「自然とともに暮らす」現地の人びとのライフスタイルや生活文化もまた重要な観光資源である。彼らの自然素材を用いた生活用品の一部は、「伝統的手工芸」として評価され、観光客向けの土産物に転じて生産・販売されることによって、現地の人びとの生活を潤している。エコツーリズムという観光形態は、住民の文化資本としての「自然とともに暮らす」ライフスタイルやそれによって育まれた生活文化に「伝統文化」という象徴価値を付与することによって、経済資本に転換するシステムなのである。

観光客に人気のあるマダガスカルの手工芸には、ラフィア<sup>3)</sup>で編んだ帽子や籠、空き缶を利用したブリキのおもちゃをはじめ、さまざまなものがある。マダガスカル観光局は、マダガスカルを代表する優れた手工芸品として、ザフィマニリの木彫、アンテムルの手漉き紙<sup>4)</sup>、アンパヒニ地方のモヘヤ・カーペット<sup>5)</sup>、中央高地の野蚕シル

ク織物の4つをあげている。このうち森林資源を利用した手工芸は、ザフィマニリの木彫と野蚕シルク織物である。この節では、本稿のテーマである森林資源の活用という視点から、森の民とよばれるザフィマニリの人びとの生活とかれらの木彫製品の生産の現状を概観してみたい。

ザフィマニリは、中央高地南東部の森林地帯に住む住民集団である<sup>6)</sup>。彼らは、焼畑耕作によるタロイモやトウモロコシ、インゲン豆の生産とともに、さまざまな森林資源を活用した生活を営んできた。稲作が導入されたのは50年ほど前であり、つい最近まで、水田はあまりなかった。ザフィマニリの木彫は、独特の幾何学模様や人物像の造形美が高く評価され、世界無形遺産にも登録されている。彼らの木彫は、彼らの生活に根ざした家財道具や家屋の窓や扉を飾る彫刻から生まれた。

ザフィマニリの木彫が広く世に知られるようになったきっかけは、1960年代にこの地方を襲った飢饉にあった。食糧難に苦しむザフィマニリの人びとを救うために、一人の神父が首都にある芸術考古博物館を訪れ、彼らの伝統的な調度品を購入してもらえないかともちかけた。芸術考古博物館はザフィマニリの村に調査団を派遣し、精緻な彫刻がほどこされた家財道具や腰機を博物館資料として購入した。村人たちはそれで得た現金収入で食料を買い、生活の危機を乗り越えた。これを契機にザフィマニリの木彫の美しさが、都市の金持ちや外国人に注目されるようになり、彼らの先祖伝来の家財道具が商品として売られるようになった。ザフィマニリの人びとが暮らす村は森林の奥地にあり、観光客が来ることはほとんどない(写真2)。しかし、1970年代ごろから木彫の皿、スプーン、パネル、木像といった観光客向けの木彫製品が作られるようになった。現在では、フィアナランツォア(Fianarantsoa)からアンブシチャ(Ambositra)にかけての幹線道路沿いの



写真2 ザフィマニリの村

ホテルや土産物屋の店先にたくさんの木彫製品が山積みされ、この地方を代表する物産として販売されている。

一方、ザフィマニリの居住地では、人口増加と焼畑による開墾、木材の伐採がすすみ、急速に森林が減少していった。

写真3は、ザフィマニリの居住地域(2008年現在)である。写真左側の豊かな森林は、政府が自然保護区に指定した地域である。写真中央の川を挟んで右側の土地は、開墾がすすみ、ほとんど原生林が残っていないのが見て取れる。自然保護区の設定によって、住民が資源を利用できる森林の面積は大幅に減少した。残された土地は開墾と焼畑の繰り返しにより、疲弊している。こうして、かつて家屋や調度品の彫刻に用いる木材を調達してきた原生林はほと



写真3 ザフィマニリ居住地域の森林の現状：自然保護区(中央に流れる川の左岸側)と非保護区域(川の右岸側・手前)

んど失われた。木彫の材料のなかでもっとも高価な紫檀は、もともとザフィマニリの居住地域より低緯度の東部森林で産出され、この地域まで運ばれてきていたが、現在、紫檀は資源保護の対象となり、一般に伐採が禁じられている。

こうして森林資源に依存した伝統的な生活を維持するのが困難になったザフィマニリの人びとは、1970年代から観光客向けの木彫の仕事に特化してそれを専業とするか、あるいは、木材伐採の技術を生かしてマダガスカル西海岸の伐採キャンプに出稼ぎにできるようになった(内堀2006:23)。村ではすでにほとんどの家が、彫刻の施された先祖伝来の家財道具や扉などを売り払ってしまっている。インドネシアとの文化的な繋がりを示すといわれる腰機もほとんど失われた。機織りの技術継承者は、高齢婦人が数名残るのみである。ただし、彼女たちもまたすでに織物はやめ、美しい彫刻のついた織機も売られてしまった。

マダガスカル政府のエコツーリズム振興政策は、観光産業の発展、自然環境の保全、自然資源を活用した伝統文化の継承という、三要素をうまく絡ませることによる持続可能な開発をめざしている。しかし先に述べたように、森林伐採による環境破壊とそれに抗するための森林保護政策の双方による



写真4 木彫をするザフィマニリの若者

生活環境の変化のなかで、かつて森林資源を活用した文化伝統の担い手であったザフィマニリの生活に根ざした木彫文化は失われようとしている。現在、ザフィマニリの村人の多くは、材木を荒削りして観光客向けの皿や器などの製品の原型をつくる安価な下請け仕事をしている。その原型を製品に仕上げ販売しているのは、幹線道路沿いの町に暮らすベチレオの人びとである。ザフィマニリの木彫の「伝統的」な技術は、ベチレオの人びとによって、都会の裕福な住民向けの彫刻付き大型家具の生産や、カメレオン、キツネザル、農村の男女像などをモチーフとする独特の造形芸術へと発展している。一方、現在、山奥の村に暮らすザフィマニリの人びとの現金収入を支えているのは、伝統的な生活文化に根ざした手工芸としての木彫ではなく、森の奥深く隠れてつくられ、いくつもの山を越えて運ばれる密造酒である。

それでは、森林資源を活用したもう一つの伝統的な手工芸である野蚕織物の生産の現状はどうだろうか。マダガスカルの家蚕糸・野蚕糸による織物生産は、植民地時代からマダガスカル経済を発展させる可能性をもつ産業として期待されてきた。とくに近年では、農村の貧困脱却のための持続可能な開発の手段として注目され、国連の援助計画や海外諸国の NGO 活動にたびたび組みこまれてきた。たとえば、アメリカを基盤とした非営利組織「貧困削減をととした環境保護 (CPALI: Conservation through Poverty Alleviation)」は、マダガスカル野生生物保護協会 (WCS: the Wildlife Conservation Society) と協働して、生物学的多様性の保全に繋がる経済発展を支援するために、2007年よりマダガスカル北東部のマキラ保護区 (the Makira Protected Area) 隣接地域をモデル地区として、野蚕によるシルク産業の再活性化に取り組んでいる<sup>7)</sup>。国際連合工業開発機構 (UNIDO: United Nations Industrial

Development Organization) もまた、マダガスカル貧困削減のための援助活動の一環として、「シルクとテキスタイルのための投資と技術促進」(Investment and Technology Promotion for Silk and Textile) を進めている。2007年11月13-17日には、マダガスカル政府との共催で、「絹の日(Journée de la soie)」と題して、全国から家蚕・野蚕の生産・販売に関わる主たる人びとを招集し、産業開発のための会議とシルク製品の展示をおこなった<sup>8)</sup>。しかし、このように長年にわたってさまざまな機関が試みてきた野蚕プロジェクトが、野蚕の製糸と製織によるシルク産業の活性化にうまく結びついていないのも事実である。そこには、どのような問題があるのだろうか。マダガスカル野蚕シルク生産現場の状況をみてみよう。

### 3. 野蚕の種類と生息地の状況

マダガスカル野蚕布は一般にランディと総称される昆虫の繭から紡いだ糸をつかって織られる。家蚕と野蚕を区別する場合は、繭のサイズの違いに基づいて、家蚕を「小さな蚕」を意味するランディケリ (Landi-kely) とよび、野蚕を「大きな蚕」すなわちランディベ (Landi-be) とよぶ。ただし、ランディベとよばれる野蚕には、繭から糸を採ることができるともさまざまな種が含まれており、その数は10種とも20種とも、ときにはそれ以上ともいわれる。しかしながら、野蚕種の分類や分布、生態などの詳しい実態は、いまだ十分に把握されてはいない。同じ種であっても地域によって異なる名称でよばれており、逆に異なる種が同じ名称でよばれていることもあるため、名称だけでは種の同定や亜種の把握は難しい。そのなかで、現在、織物生産に使われている野蚕種はおもに4種であり、その亜種も多い<sup>9)</sup>。その他に織物には適さないが、標本用に採集・販売されている種

がある。流通にのっている5種の野蚕を、便宜的に現地語名をつかい以下のように区別しておく。

- ① ランディベ (Landi-be)、学名 Gonometinae, Borocera Madagascariensis : タピア (Tapia) の葉を食餌とするので、ランディタピイ (Landi-tapy) とも呼ばれる。おもな生息地は、中央高地で、首都アンタナナリヴ (Antananarivo) 近郊、アンブシチャ地方およびラヌヒラ (Ranohira) 地方。繭の色は白っぽい薄茶で、4~5cmの卵形の個体である。同じ Gonometinae 種の Borocera cajani は、豆科植物など多様な植物を食餌とし、Borocera Madagascariensis とよく似た繭をつくり、同じくランディベとよばれている。一般に、これら亜種の繭は一括して扱われている。(写真5)
- ② グナラ (Gonara)、学名 (未確認)<sup>10)</sup> : ランディフンク (Landi-honko) とも呼ばれる。食餌はキリキリ (Kilikily) の葉をはじめ、さまざま*だ*といわれるが詳細は不明である。おもな生息地は、マダガスカル西南部のムルンダヴァ (Morondava) およびトゥリアラ (Toliara) 地方。

繭の色は薄茶から濃茶で、3cm前後の小型の個体である。(写真6)

- ③ サランガ (Saragna)、学名 (Hypsoides, diego) : ムンドウリイ (Mondry) とも呼ばれる。食餌はおもにレンギティ (Rengitry) の葉。おもな生息地は、マダガスカル西北部のマンピクニイ (Manpikony) やブリジニイ (Boriziny) 地方である。繭の色は白で、大型の長円形 (マスク状) の集合体である。10cmほどの小さい繭から、1メートルを越えるものまで、大きさはさまざまである。繭の色が薄茶で、木の洞をうめるように繭をつくる亜種もある。(写真7)
- ④ ブドゥルケ (Bodoroke)、学名 Notodontidae, Anafé Aurea/ Hypsoides singularis : 食餌はおもにトゥングビビイ (Tongobivy) の葉で、生息地はムルンダヴァ地方をはじめマダガスカルの北東部から南東部にかけての森林地帯である。繭は薄茶色で、15cmから50cmほどの集合体である。Notodontidae 種には、球形や逆三角形の大型繭をつくる Anafé Aurea と紡錘形の大型繭をつくる Hypsoides singularis がある。(写真8)



写真5 ランディベの繭と糸

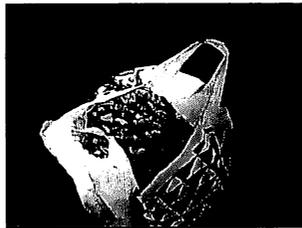


写真6 グナラの繭



写真7 サランガの繭



写真8 ブドゥルケの繭



写真9 ランディヴラの繭

⑤ ランディヴラ (Landi-vola)、学名 Saturniidae, *Argema Mittrei*: 食餌は多様といわれ明確ではない。生息地は広く、アンブシチャ地方の山中に多く生息する。繭の色は銀色で、7~8 cmの網目状の卵型の個体である。ランディヴラの巨大で美しい緑色の蛾と銀色の網目模様の大きな繭は、世界中の昆虫ファンに人気がある。ランディヴラの成虫と繭をセットにした標本は、観光客向けの人気商品である。ただし、ランディヴラの繭から織物用の糸を紡ぐことはできない。同じ Saturniidae 種の *Anterina suraka* もまた、鮮やかな牡丹色の羽根をもつ蛾と銅色の網目状の繭が、標本として売買されている。(写真9)

以上の5種のうち、織物生産に利用できる4種について、もう少し詳しく述べておこう。このなかで、古くから織物用に糸が採取されてきたのは、ランディベである。かつては、マダガスカル各地の王族や首長が、ランディベの糸で織ったランバ (lamba)<sup>11)</sup> とよばれるショールを纏っていた。しかし、アンタナナリヴ近郊のタピアの森は激減し、それとともにこの地域に生息するランディベも減少した。かつては繭の仲買人が村をまわって野蚕の繭を買いつけていたが、近年は、そうした仲買人もほとんど来なくなった。そのため農民たちは繭を見つけても、蛹を食用にするだけで、ほとんど繭は捨ててしまうという。中には、見つけた繭を少しずつためておいて業者がきたときに売る者もあるが、その量も小さなビニール袋一杯分程度である。

タピアの森が最も多く、野蚕布の製織の中心地である中央高地のアンブシチャ地方でも、近年、タピアの森が激減しランディベも減少している。おなじランディベであっても、生産地によって色と質は、微妙に違っている。そうした違いは広く製織者のあいだに知られており、繭が白く大きいほ

ど価格は高い。また糸質によっても価格は異なる。もっとも色が白く大きく上質な繭がとれるといわれているのが、中央高地から南に下がったラヌヒラ地方のイサル (Isalo) である。ラヌヒラ地方には製織の伝統はなく、農民は繭を採集して、アンバラバウ (Ambalavao) やアンブシチャから来る繭の仲買人に販売する。この地方の農民は、野蚕繭を採集するために森に入るときには鉄製品を携帯しないとといった特別な儀礼的慣習を守り、繭が採れないときは牛を供儀して神に祈願する。しかし、この地方も数年前に大きな山火事に見舞われ、広大なタピアの森が一夜にして焼失した。さらに、政府がイナゴの害を防ぐため水田に空中散布した農薬によって、ランディベもまた多く死に絶えてしまった。タピアを食餌とするランディベの減少にともなって、最近では、グナラとよばれる野蚕種の繭が多く使われるようになってきている。各地の農民が採集した繭は仲買人に売られる。仲買人はそれを大袋に集めて製糸業者に売り、あるいは仲買人自身が製糸をして織工に販売する。ランディベとグナラの製糸法は若干異なり、また糸質の違いにより価格も異なるが、織工のもとに持ち込まれたランディベとグナラの糸は、普通、特に区別されずに製織されている。グナラの糸はランディベの糸より色が黒く光沢がなく、手触りが悪いため安価である。

ごく最近まで、サランガとブトゥルケは、糸としてあまり使われなかった。サランガの糸で織った屍衣(遺体を包む一枚布)<sup>12)</sup>は、白く美しいと評価され高値で販売されている。ただし繭の供給は少ない。サンドウラングヒの製織業者は、ブトゥルケの繭も使用しているがごく少量である。サランガとブトゥルケの製糸と製織が本格的に試みられるようになったのは、明らかにランディベの減少によると考えられる。サランガとブトゥルケの分布地域は広いが、その生態はまだ研究されておらず、生息数も明らか

ではない。マダガスカルは森林面積が減少する中で、サランガもブトゥルケの数もまた減少しているようである。

#### 4. 野蚕布生産の状況

マダガスカルにおける野蚕布製織の歴史は古い。野蚕布は、現在も中央高地の人びとの屍衣や南部の王族の儀礼衣装としてのランバ（写真10）に用いられている<sup>13)</sup>。19世紀、メリナ王権の統治下で、絹織物は王侯貴族の特権的な衣装と定められ、庶民の着用は禁じられた。メリナ王ラダマ（Radama）一世が家蚕種を導入し、当時の首都タナナリヴ（Tananarivo）周辺に養蚕・製糸・製織の地域分業にもとづいた野蚕と家蚕の織物生産システムを組織した。一方、メリナ王権の支配地域がマダガスカル島のほぼ全域に拡大し、中央高地を中心とした地方行政制度が確立するとともに、メリナの改葬儀礼の慣習が周辺地域に浸透していった。それにともない、野蚕の屍衣の市場も拡大した。野蚕繭の一大生産地で

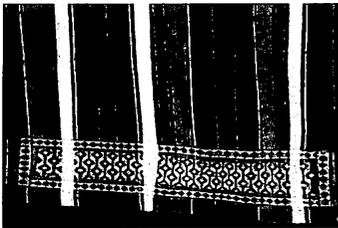


写真10 野蚕糸の儀礼用ランバ



写真11 家蚕糸のランバをまとったメリナの正装

あるアンブシチャ地方では、野蚕繭は「女王への貢納品」となり、野蚕の食餌となるタピアの森の保護政策がとられた。さらに、この地方に行政官として派遣されたメリナの織工集団とメリナ商人の活動によって、サンドゥランダヒを中心に、ベチレオの織工による野蚕織物の生産が大きく発展した。

メリナ王権が確立した野蚕・家蚕の生産システムは、フランス植民地統治期をとおしてほぼ保持された。フランス政府は、毎年、野蚕が生息するアンブシチャの森林の繭の販売権と森林の管理義務とを組み合わせさせて入札させ、森林保全につとめた。植民地化以降、王国時代の服飾規制が廃止され、王侯貴族以外の人々も家蚕布着用を許されるようになった。家蚕糸で織られたランバは、メリナの人びとの正装として一般に定着した（写真11）。その結果、中央高地では家蚕織物は生者の衣装、野蚕織物は屍衣というイメージが形成され、生者が野蚕織物を身につけるのが忌避されるようになった。しかし、家蚕糸のランバは、メリナ以外の人々のあいだにはほとんど浸透しなかった。彼らのあいだでは、首長の権威を象徴する儀礼用衣装として、野蚕糸で織られたランバが用いられ続けた。一方、庶民の日常着は、ラフィアやマダガスカル綿など地域の植物をもちいた織物から海外からの輸入布や輸入衣料へほぼ完全に移行し、ラフィアや葦、樹皮など、それぞれの地方の植生を利用した植物繊維をつかった日常着の織物生産は衰退した（杉本 2001：18-22）<sup>14)</sup>。

独立後、政府による森林の管理制度が放棄された。それによってタピアの森の伐採がすすみ、森が減少するとともに、野蚕繭の供給も減少した。その結果、野蚕糸が入手しにくくなり、野蚕織物の価格が高騰した。そのため、貧しい人びとは、屍衣に輸入綿布や化繊布を使い始めた。それは野蚕屍衣の需要の減少を引き起こし、多くの織工が野蚕織物の生産を断念して、安価で楽

に量産できる輸入糸による綿織物の生産に移行した。それによって、野蚕糸で織った屍衣の価格がさらに上昇した。こうした悪循環のなかで、さらに多くの織工が、都市の富裕層や外国人向けのテーブルクロスやナプキン、インテリア用品用の綿布生産に従事するようになった。野蚕布の生産が減少すると、仲買人が定期的に村を訪れて繭を集めることも少なくなり、農民たちが繭をためておくこともなくなった。こうして、現在では、野蚕繭の仲買人も野蚕布の織り手も、繭の入手に苦勞する状況となっている。一方、海外からのツーリストの増加と、欧米における天然繊維への関心の高まりによって、野蚕糸で織ったショールやマフラーの海外向け市場が形成された。そうした海外ファッションの影響をうけて、この数年来、首都の中産階層のあいだに、おしゃれ着として家蚕織物のみならず野蚕織物の着用が流行している。また、伝統的な正装や儀礼のための家蚕布の需要に加えて、外国人観光客のお土産やマダガスカルの人びとのあいだでのクリスマスの贈り物として、家蚕もしくは家蚕と野蚕を交雑したショールやスカーフの需要も増加しつつある。野蚕糸による屍衣の生産は依然として低調であるが、家蚕糸や家蚕糸・野蚕糸交雑の織物市場は好調である（杉本 2006：112-113）。

## 5. 野蚕布製織地および流通の現状

アンタナナリヴの北部から西部にかけての一角は、古くからの養蚕地域で、家蚕糸を使った織物生産が盛んである。この地域で、かつてメリナ王国の王国貴族向けの織物を生産していた町が、サブニメリナ（Soavonimerina）である。ここでは、かつて野蚕布を生産していた織工のほとんどが、野蚕布の生産を断念して、家蚕布の製織に移行するか、あるいは輸入の綿糸や化繊糸による布を生産している。首都から

南下する街道の要所であるアンチラベ（Antirabe）の近郊でも、かつては自分たちで繭をとり、糸を紡いで織っていたが、いまではほとんど野蚕繭がとれなくなったため、家蚕糸あるいは綿糸で製織している。

現在、マダガスカルにおける中心的な野蚕布生産地は、中央高地のアンブシチャ地方一帯、とくにサンドゥラングヒと、さらに南部のアンバラバウである（写真12、写真13）。この地方のベチレオの農民は、一年の気候の変化に基づいて、水稻耕作と養蚕そして野蚕糸と家蚕糸の製織を組み合わせた複合的な生産をおこなっている<sup>15)</sup>。先に述べたサンドゥラングヒでも、野蚕が減少して繭の価格が高くなり、野蚕織物が売れなくなったため、輸入綿糸をつかった織物の生産が増加している。町では、野蚕・家蚕織物の生産者40名が絹織物業組合をつくって絹織物の生産を継続しているが、そのうち野蚕だけを扱う製織業者は1名のみである。製織産業全体の趨勢をみるなら、この地方においても野蚕織物の生産、とりわけ伝統的な儀礼衣装や屍衣の生産は衰退傾向にある。同様の状況は、アンバラバウでもみられる。

そうしたなかで、近年、農村女性のエンパワメントを目的とした政府や海外 NGO の助成の下に、女性たちの織物組合が各地につくられ始めている。アンブシチャ地方の野蚕生息地として知られるアンバトゥフィナンドゥラハナ（Ambatofinandrahana）には、海外の NGO から資金援助を得た村



写真12 野蚕の糸紡ぎ



写真13 野蚕糸による製織

の女性たちを中心に、3つの織物組合がつくられている。いずれの組合もメンバーの数は40人から70人ほどで、規模は決して大きくはないが、観光客向けのマフラーを生産して、現金収入を得ている。彼女たちは村に近い森林で野蚕の繭を集め、糸を紡いで織っている。彼女たちがつくる野蚕布は、しばしば海外にマダガスカルを紹介する雑誌記事に取り上げられている。田舎の緑豊かな風景と伝統的な赤土の家屋、手織機の前に座る村の女性、紡績錘、素朴な風合いの糸や手織マフラーの写真が、読者をマダガスカルの旅に誘う<sup>16)</sup>。また、アンバラバウで結成された一つの織物組合は、売店をもち、野蚕糸のショールだけではなく袋物、ハンドバッグ、ネクタイなどを生産し販売している<sup>17)</sup>。女性たちの組合による野蚕布の生産規模は小さいが、これまで繭の採集やシルク産業の下請け仕事に就いていた農村女性に、新しい現金収入と起業の機会を与えることになったのは確かである。

## 6. 森林資源の持続可能な開発としての野蚕シルク生産の振興に向けて

繰り返しになるが、マダガスカルの野蚕が生息する森林環境の変化は著しい。最後に野蚕シルクの生産を再興し促進することによって、マダガスカルの森林資源を保全しつつ村落経済を発展させる上での現在の問題点とそれに対する対応について考察したい。

野蚕シルク生産の発展を阻害している最大の問題である野蚕繭の供給の減少理由は、牧草地の野焼きや焼畑、山火事による森林の焼失による森林環境の破壊だけではない。政府の林業振興政策によって導入された松の繁茂によるタピアの森の植生変化、同じく政府の農業振興政策によって、稲を食い荒らすイナゴへの対策のためにインドから導入したマルタイナという鳥による幼虫の捕食などによっても、野蚕は激減している。

マダガスカル政府は、現在、森林環境を保全するために国有林の伐採をほぼ禁止し、村人を組織して団体をつくらせ、村の管轄地域における野生動物の密猟や無断伐採の監視と植林を義務づけている。タピアの森がある地域の村民団体は、一方で、政府にタピアの植林を奨励されながら、他方で、全国一律の森林保全政策のために増えていく松の木の伐採を禁じられている。松は成長が早く木材として輸出可能なため、政府が森林保全と林産業振興のために海外から導入した植物である。しかし、松は植林された地域をこえて種を飛ばし、今やマダガスカル各地の森林に増殖している。成長が早い松の日陰になって、タピアが枯れていく。村人はタピアの種をとり、発芽させて苗木を植林するように指導されている。しかし、苗の植え付け時期や植え付け方法といった初歩的な栽培技術もないまま、植林を試みては失敗を繰り返している。タピアの植林は遅々として進まない。ただ森林面積を増やすのではなく、地域の植生を掌握し、それを保全するために必要な伐採許可を認めるきめ細かな森林保全政策や、植林のための村人への技術指導の徹底など、政府の林業政策の見直しが求められる。

政府や国連、海外 NGO の野蚕シルク生産を援助するプロジェクトや、近年の都市の富裕層向けファッション市場の拡大にもかかわらず、野蚕シルクの増産が進まない最大の理由は、繭および糸の公設市場の欠如といった制度化された流通システムの不在にある。繭を集める村人と織工、織工と都市の絹織物業者やブティック、観光客向け土産物屋の間を媒介しているのは、伝統的な仲買人制度である。村人と仲買人、仲買人と織工の関係は、親から子へと代々受け継がれている。繭や糸の需要と供給の状況に関する情報も、仲買人が一手に握っている。繭の種類や品質、そして糸の種類や品質による価格の設定も、慣習的に仲買人が決めることになっている。繭の採集者で

ある農民と織工のあいだの情報交換の手段も、両者が直接取引をするシステムもない。そのため、一方で、仲買人が来なくなったために繭は打ち捨てられていながら、他方で繭や糸が入手できないために野蚕布の生産を断念する織工が増えるという状況が生じている。また、良質な糸を紡ぐことができる野蚕種の糸と糸質の悪い野蚕種の糸が混ざって販売されることによって、野蚕織物の品質低下を招いている。野蚕布の品質の向上と糸の供給システムを確立するためには、政府主導による野蚕種の実態調査、繭や糸の品質によって価格を定める等級制度の確立、公的な監視の下での繭のオークション制度の導入などが必要であろう。

また、現在、マダガスカル野蚕織物の価格は、基本的に大きさのみで決まっている。糸の品質、製織技術、染色の手間と染めの品質、模様織の有無といったデザインに応じた制作時間の違いなどは、ほとんど考慮されていない。それは、品質のよい織物の生産を奨励するシステムの不在を意味するにほかならない。織工の技術力とモチベーションを高めるためには、布の大きさのみならず品質のよさや手間に配慮した価格設定の仕組みをつくる必要があるだろう。

近年、グローバルな規模で起きている環境意識の高まりや、エコブーム、スローライフによる自然素材の流行によって、マダガスカル野蚕糸をつかったショールが、フランスを中心にヨーロッパで人気を集め、高額で取引されるようになってきている。野蚕織物の生産や流通に関わる人びとの期待は、こうした海外市場に向けられている。とはいえ、そうした市場の規模はあまり大きくはないし、流行は一過性である。むしろ、マダガスカル国内の市場拡大のため、野蚕布といえば屍衣すなわち死者の衣装であるといったネガティブなイメージを払拭するためのキャンペーンや、野蚕の手織ランバもしくは軽いショールやマフラーをマダガスカルの「伝統」文化として位置づけ、

そこにファッション性を付加することによって、安定したマーケットをつくる必要があるだろう。そのための政策として、地域ごとに特徴ある野蚕種別の製品や、地方のデザインを活かした新しい織物の創出、そして日本やインドの高度な製糸および撚糸の技術導入による品質向上が求められている。

エコツーリズムの聖地マダガスカルにおいて、森林資源の保全と結びついた持続可能な経済発展に向けた野蚕シルクの生産体制を確立するためには、現在のように、海外諸国や海外 NGO の援助の下で、織物生産のプロセスの一部に焦点をあてた部分的かつ短期的な野蚕シルク産業の助成プロジェクトを繰り返していてもあまり効果は期待できないだろう。マダガスカル政府の工芸局が提唱するようないわゆる「伝統工芸」としての「素朴な伝統的織物の技術保全」といった文化政策もさることながら、流通システムの整備のような経済政策を実施する必要がある。そのためにも、政府が省庁ごとのプロジェクトとして個別に実施している農業振興政策、林産業振興政策、商工業振興政策、観光振興政策を総合的に俯瞰した視野から、持続可能な開発の可能性を模索することが求められている。それによってこそ、エコツーリズムと森林環境の保全、そして野蚕シルク生産の振興による地域住民の経済発展が相互に連携した「持続可能な開発」の実現可能性が見いだされるだろう。

#### 引用文献

- Bloch, Maurice 1998 *How We Think They Think: Anthropological Approaches to Cognition, Memory, and Literacy*. Oxford: Westview Press.
- Coulaud, Daniel 1973 *Les Zafimaniry: un groupe ethnique de Madagascar à la poursuite de la forêt*. Antananarivo: F.B.M.
- Fee, Sarah 1997 *Binging Ties, Visible Women: Cloth and Social Reduction in An-*

- droy, Madagascar. *Etudes Océans Indiens (Actes du Colloque Etienne de Flacourt)*, vol. 23-24, pp.253-280.
- Green, Rebecca 1998 *Addressing and Redressing the Ancestors: Weaving, the Ancestors, and Reburials in Highland Madagascar*. Ph.D. dissertation, Indiana University.
- Kreamer, C. Mullen and Sarah Fee (eds.) 2002 *Objects as Envoys: Cloth, Imagery, and Diplomacy in Madagascar*. Washington: Smithsonian Institution, National Museum of African Art.
- Kusimba, M. Chapurukha, J. Claire Odland, and Bennet Bronson (eds.) 2004 *Unwrapping the Textile Traditions of Madagascar*. UCLA Fowler Museum of Cultural History Series, No.7. Los Angeles: The Field Museum and the UCLA Fowler Museum of Cultural History.
- Mack, John 1989 *Malagasy Textiles*. Bucks, U.K: Shire Publications.
- Payet, Christine 2008 "Du cocon au fil de soie", *Orchid*, Juin 2008, Air Madagascar, pp.28-38.
- 石森秀三 2002 「21世紀は『自律的観光の時代』」、『科学 特集エコツーリズムの展望』Vol. 72 No.7、岩浪書店、pp. 706-710.
- 市野進一郎 2007 「マダガスカル、ベレンティ保護区におけるキツネザル類の保全状況とその課題」、『アジア・アフリカ地域研究』第6-2号、pp. 197-214.
- 内堀基光 2006 「ザフィマニリ社会について」、文科省科学研究費補助金研究成果報告書『地方独立性移行期マダガスカルにおける資源をめぐる戦略と不平等の比較研究』（研究代表者：深澤秀夫）、東京外国語大学、pp. 21-28.
- 川又由行 1999 「マダガスカルの自然保護と環境保全」、山岸哲編『マダガスカルの動物』裳華房、pp. 263-309.
- 杉本星子 2001 「ファッション・マラガシイーマダガスカル・ファッションと近代的身体の形成」、京都文教大学人間学部研究報告『人間・文化・心』第四集、pp. 15-34.
- 杉本星子 2006 「マダガスカルの野蚕・家蚕複合生産：歴史と現状」、文科省科学研究費補助金研究成果報告書『地方独立性移行期マダガスカルにおける資源をめぐる戦略と不平等の比較研究』（研究代表者：深澤秀夫）、東京外国語大学、pp. 103-115.
- 深澤秀夫 1998 「マダガスカル断章 マダガスカル、過去と現在が織りなす世界」、『季刊民族学』 86号、pp. 14-33.
- <ホームページ>  
 駐日マダガスカル大使館：[http://madagascar-embassy.jp/japanese/tourism\\_jp.html](http://madagascar-embassy.jp/japanese/tourism_jp.html)  
 CPALI: "18 month Report 2007-2008", <http://www.ruffordsmallgrants.org/files/CPALI%2018%20MONTH%20REPORT.pdf>  
 UNIDO: "Support to Income and Employment Generating Activities for Poverty Alleviation", [http://www.unido.org/index.php?id=4835&ucg\\_no64=1/data/project/project.cfm&c=40856](http://www.unido.org/index.php?id=4835&ucg_no64=1/data/project/project.cfm&c=40856)  
 WWF (The World Wildlife Fund):[http://www.air-mad.com/about\\_parks.html](http://www.air-mad.com/about_parks.html)
- 注
- 1) マダガスカルの人びとの人種的な系統や、民族分類の複雑さについては、深澤 (1998) が簡潔にまとめている。
  - 2) 市野は、小規模な保護区のひとつであるベレンティ保護区のキツネザルの保全状況を調査し、小規模な保護区は伝染病などによる影響を受けやすく、適切なモニタリングが必要であること、保護区内に人為的に栽植された導入植物が、キツネザルの採食行動や遊動に影響を与えている可能性があることなどを指摘している (市野 2007)。
  - 3) ラフィアはマダガスカル原産の椰子で、葉を水にさらし繊維状に裂いて糸にして、衣服や帽子、籠などさまざまに加工する。
  - 4) マダガスカル南東部に暮らすアンテムルの人びとの手漉き紙は、かつて「ソラベ」といわれるアラビア表記マダガスカル語のカリグラフィを筆記する用紙として用いられていた。しかし、19世紀にアルファベットによるマダガスカル語表記が導入されると、「ソラベ」が使われることはなくなった。アンテムルの手漉き紙は、もっぱらランプなどインテリア用の紙や、観光客向けに押し花を漉き込んだカード、アルバム、タペストリーなどに使われている。ホテルに工房を併設し、観光客に製作工程を公開しているところもある。
  - 5) マダガスカル南部のアンパヒニの町で作られるアンゴラ山羊の毛を使ったモヘヤ・カーペットの製織技術は、植民地時代に山羊や羊とも

- にフランスから導入されたものである。かつては国営工場があったが、経営不振で放棄された。現在は、住民たちが協同組合をつくって細々と生産を続けている。近年、新しい技術が導入され、マダガスカル南部のマハファリーやアンタンドゥルイの彫刻のモチーフなどをつかったデザインを織り込んだ高品質な製品がつくられるようになった。しかし、それらのカーペットは都市の裕福な人びとや外国人観光客向けの製品であり、生産地の人びとの生活文化に根づいているとはいえない。
- 6) ザフィマニリの森林資源を活用した伝統的な生活とその変化については、Bloch (1998)、Coulaud (1973)、内堀 (2006) などの調査研究がある。
  - 7) CAPLI 報告書2008年参照。
  - 8) 招集された参加者は、地方の製織協同組合代表、養蚕業者、製糸業者、シルク製品の生産・販売者、デザイナー、研究者と多岐にわたり、シルク産業をめぐるさまざまな問題が議論された。著者もこの会議に参加し、マダガスカルのシルク産業の全体的な状況を把握する機会をえたが、そこで痛感したのは野蚕に関する専門的な研究者による研究成果が乏しいことと研究成果の現場への還元するシステムの欠如であった。
  - 9) この4種のほかにも、たとえばマダガスカル北東部では学名 *Anterina suraka* の繭からの製糸が試みられているが、まだほとんど流通にはのっていない。
  - 10) 昆虫学の分野においては、マダガスカルの多様な野蚕種が収集、分類されているが、成虫だけの標本であり、繭の同定は多くの場合不明確である。現段階では、著者はグナラの学名について確認できていない。
  - 11) ランバとは、身体を覆う一枚の布で、厚手の肩掛けもしくはショールである。ただしマダガスカルの人びとにとって、ランバは単なる布以上の象徴的な意味をもっている (杉本 2007: 103)。
  - 12) メリナの人々は、野蚕糸で織った布を4枚ほど繋げて大きな一枚の布をつくり、それで遺体を包んで墓に納める。何年か後に、ふたたび墓から遺体をだし、盛大な儀礼をおこなって祖先と再会する独特の葬礼慣行をもつ。
  - 13) マダガスカルの織物の種類や歴史については、Mack (1987)、Fee (1997)、Green (1998) などの研究があるほか、フィールドミュージアムとスミソニアン・ミュージアムで開催されたマダガスカルの染織展に際して編まれた Kreamer and Fee 編 (2002)、Kusimba 他編 (2004) にまとめられている。
  - 14) マダガスカルにおけるファッションの変化については、杉本 (2001) で論じているので、本稿では割愛する。
  - 15) マダガスカルの野蚕・家蚕複合生産については、杉本 (2006) で報告している。
  - 16) 典型的な事例は、エア・マダガスカルの機内誌「オーキド Orchid」2008年1月号である (Payet 2008)。
  - 17) 女性のエンパワメントを目指す手工芸組織には、野蚕製織だけではなく、ラフィアをつかったバッグやマットなどの生産組合、刺繍製品の組合など、さまざまなものがある。アンバラバウの売店には、これらの組合の製品も並べられている。

**ABSTRACT****Wild Silk Production in Madagascar, a Sacred Place of Ecotourism  
—A Study on the Sustainable Development of Forest Resources—**

Seiko SUGIMOTO

## Prologue

1. Ecotourism in Madagascar
2. Traditional handicrafts making use of forest resources
3. Species of wild silk moths and the current situation of their habitats
4. Yarn and textile production of wild silk
5. The current situation of wild silk production centers
6. Suggestions for the promotion of wild silk production as a way to sustainable development of forest resources in Madagascar

Can development be sustained without destroying the forest environment in Madagascar? This article aims to discuss the possibility of the promotion of the wild silk industry as a way of sustainable development of the forest resources of Madagascar.

Madagascar, the fourth biggest island in the world, is famous for the remarkable fauna and flora embracing very numerous indigenous species, which attract many tourists from abroad every year. That is why Madagascar is referred to as a sacred place of ecotourism. However, the forests of Madagascar are vanishing rapidly, because of cutting down trees, clearing land for cultivation, slash-and-burn farming, and grass fires. It is said that less than 10% of virgin forests remain today.

The government of Madagascar is looking for ways to alleviate poverty in rural areas, through both the preservation of the natural environment and the promotion of ecotourism. In such a situation, the traditional wild silk industry in Madagascar has been watched with keen interest as one of the subjects of the sustainable development policy of the government and international aid organizations like the United Nations Industrial Development Organization and NGOs. But most of the projects on wild silk production seem not to have achieved successful results.

Through my field research in Madagascar during these several years, it became clear that the wild silk industry has gone into a steady decline due to the following vicious spiral: the reduction in numbers of wild silk cocoons because of deforestation, a steep rise in the prices of “lamba-mena (a ritual cloth for wrapping a corpse)” made of wild silk, the replacement of “lamba-mena” by textiles made of cotton or synthetic fiber, abandonment of spinning and weaving wild silk because of the diminution of the domestic market of “lamba-mena”, decrease in the demand for wild silk cocoons, renunciation of supplying cocoons and abandonment of the preservation of the forest.

On the other hand, the marketing of fashionable light scarves made of wild silk or mixed fabrics of wild and domestic silk is thriving both in western and domestic markets, focusing on a new rich population influenced by the global fashion trend of featuring natural products. This indicates that there is a possibility of the development of Madagascar's wild silk industry in future, provided they can slough off the vicious spiral and correspond to this new demand.

After examining the current situation and problems at each level of the silk industry — collecting cocoons, spinning yarn, weaving textiles and marketing products, I point out the lack of a circulation system for cocoons and yarn as the biggest issue preventing the industry from restoring and promoting production. Finally, I emphasize the importance of policy-making for sustainable development of forest resources seen from various points of view beyond the division of administrative departments.

Keywords: sustainable development, ecotourism, silk production, forest resources, handicrafts